



日野病院の孝田雅彦病院長が、さまざまな病気や健康について、その予防法や健康に過ごすための豆知識などお役立ち情報をお届けします。

### 生存率の低い膵臓がん なりやすい特徴は

2022年2月1日、石原慎太郎氏が亡くなったというニュースが飛び込んできました。89歳、膵臓がんだったそうです。膵臓がんは亡くなった有名な、昭和天皇、千代の富士、星野仙一などなど、枚挙にいとまがありません。

残念ながら、膵臓がんは最も生存率の低いがんです。膵臓はお腹の最も奥にあるため、検査をするのもなかなか難しいのです。したがって、早期に見つけるのが困難で、発見が遅れることがいまだに多いがんです。しかし、徐々に膵臓がんに対する研究も進歩してき

ていきます。まず、膵臓がんになりやすい患者さんの特徴（リスク因子）が分かってきました。近親者に膵臓がんが1人いると、膵臓がんになる確率はそうでない人の4.5倍、2人いると6.4倍になります。また、糖尿病で2倍、肥満は1.5倍、2.8倍、喫煙は1.7倍、飲酒は1.2倍、慢性膵炎は13倍、膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）のある患者は16〜22倍になると報告されています。

特に、糖尿病が発見されて間もない人、アルコールなどによる慢性膵炎の人、IPMNと診断されている人は、定期検査をぜひ受けてください。

### がん検査による早期発見で 生存率は大きく改善

それではどのような検査を受ければよいのでしょうか。一般的には簡便で苦痛のない超音波検査が行われますが、肥満、便秘のある人は脂肪やガスによって膵臓を観察することが困難です。また、CTやMRIに比べると診断能が劣ることが明らかになっています。

造影剤を用いたCTは昔から診断能が高く、標準的に行われてきましたが、定期検査として用いるのには被曝の問題があり薦められません。造影MRIは造影CTと同等の診断能をもち、被曝もありません。造影を行わないMRIでも診断能は高く、定期検査として用いるのに最適です。私が一押しの検査です。

これらの検査で膵臓に腫瘍が疑われれば、超音波内視鏡検査が必要となります。超音波内視鏡は胃カメラの先端に超音波がついており、胃の中から超音波を使って膵臓を観察し、必要な場合には腫瘍に細い針を刺して、組織検査をすることもでき

ます。組織検査によって膵臓がんかどうか、また、抗がん剤が効くかどうかも推測することができると、今では必須の検査となっています。

残念ながら、日野病院では超音波内視鏡検査はできませんが、MRI、CTは最新の装置を導入しているため、膵臓がんの検診には充分な体制を整えています。実際、私の外来ではIPMNの患者さんには半年に1回MRI検査を行っています。

膵臓がんは最も怖いがんではありますが、早期に見できれば生存率は大きく改善します。前述のリスク因子のある人は日野病院にご相談ください。

